

人権通信

2 学期末号 平成18年12月18日発行

香川県立坂出高等学校：人権・同和教育部

11 月の半ばに、文部科学大臣から子どもと、大人向けにそれぞれメッセージが出されましたが、今日いじめの問題は大きな社会問題となっています。本校でも1年生の学年団集会で、生徒といじめ問題について考えてみました。その参考としたのは、『葬式ごっこ 八年後の証言』（豊田充著 風雅書房）という本です。この本は、「中野富士見中学いじめ自殺事件」の8年後を取材したものです。

1986 年 2 月、東京都中野区の中学生在が級友らによるいじめを苦に家出をし、盛岡駅駅ビル地下街トイレで自殺した。被害者の少年の受けたいじめのなかでも、多くのクラスメイトと一部教員によって行われた「葬式ごっこ」は人々に強い衝撃を与えた。少年の机の上には、あめ玉やミカンが並べられ、花や線香も添えられていた。そして少年の写真の横には「追悼」色紙がおかれ、そこには級友の寄せ書きや「やすらかに」といった担任を含む4人もの教員のメッセージや署名もあった。

被害者の少年の級友が、8年前を振り返って、当時の心情を語っており、いじめ問題を考える資料として、現在も注目されています。この本から、当時の級友たちの声を拾ってみました。

「当時のいじめをどう思うのか？」

- ・テレビのパラエティー番組で、芸人をからかっているノリでやっている。遊びのつもりだった。
- ・からかいの延長だとどこまでやると傷つくのかわからなかった。
- ・日常的な悪ふざけやからかいが多すぎて、感覚が麻痺していた。
- ・まわりみんなも流されていった。

「いじめを生んだ環境は何だったのだろうか？」

- ・つらい目に遭っている人を助けようとする環境が少年を追い込んだ
- ・まわりに関心を持ちたくないという生き方が問題だった。
- ・自分を受け入れてくれる場所がない。どこか裏切られるのではと思っている。この疑心暗鬼の感情から、いじめを見て見ぬふりをした。
- ・自分を大きく見せたいのでいじめに加担した。

「今の生徒に何かアドバイスすることはないか？」

- ・人の生命を支えることは、相手に共感を持って話を聞くだけでも可能だし、楽しく優しい想い出をたった一つつくるだけでも可能になるのではないか？

「事件を通して考え方は変わりましたか？」

- ・今怖いものは何もない。自分が弱い人間であることを隠す必要がなくなったからだ。
- ・人間自体を軽く見るとか無関心でいる人、人間を大切にしないこととか人間に関心を持たないことに怒りを感じる。

今日の状況に通じるところがうかがえます。生徒たちが、なかまを作り、いじめを傍観せずに指摘できるいじめを許さない集団となるように、学校でも指導に力を入れていきます。

ご意見や情報がありましたら、ご連絡ください。

坂出高校(人権・同和教育担当：真下拓也)

TEL：0877-46-5125

FAX：0877-46-5896

「1年生の取り組み」

1年生は、2学期のLHRの時間（11月10・17日）に、「ハンセン病」について学習しました。ハンセン病患者は、国の誤った政策のために、家族と引き離され、強制的に療養所に入れられました。この強制隔離政策は、1996年まで続けられ、ハンセン病回復者は多くの偏見や差別を受けてきました。生徒たちは、訪問学習・諸資料・DVD視聴などによって、ハンセン病とその差別の歴史を勉強しました。

大島青松園訪問

平成18年9月30日、各クラスの代表51人が、高松市庵治町の「国立療養所 大島青松園」を訪問しました。園内を案内していただいたあと、入所されているハンセン病回復者の方々から、入所することになった経緯、差別や偏見の事例、家族や故郷への思いなどを伺いました。参加した生徒の感想文の一例を紹介します。

大島に来てよかったと思います。すごいきれいなとこだった。ハンセン病は、まちがった考えで「悪い病気」となった病気。昭和20年夏頃から、強制的に、治ったという人もつれてこられた。ほんまに、つらい話だと思う。二度と戻れないことを知っていたのなら、大島には来なかつたらと思う。なんか、上手く自分の思っていることをまとめられん。思うことが、ここに来てたくさんある。家族と別れるとか、自分には無理なことだ。骨になってからも、ずっと家族のもとに帰れなかつた人たちのためにも、ハンセン病に対する差別・偏見、ほんまになくしていきたいと思った。大自然にかこまれた、すごいきれいな大島で、幸せに、暮らしてほしい。

LHRの時間



1 時間目は、左の写真の説明から始まりました。日本最初の療養所のある岡山県の長島に架かる「人間回復の橋・邑久長島大橋」(海峡部の最狭部 30m)です。この橋は、瀬戸大橋と同じ 1988 年にやっと完成しました。「なぜ、架橋が遅れたか。」を考えました。

2 時間目は、香川県の「大島青松園」についてです。上記の訪問学習のときの島巡見や、ハンセン病回復者の方々からの聞き取りをもとに勉強していきました。今回のLHR全体の感想文を一例紹介します。

今回のように、ハンセン病について学ぶ、学校の機会を増やして、未来の人たちに誤解を与えないためにも、ハンセン病元患者さんの言いたいこと、伝えたいことを話す場を多く設けて理解を広めるべきだと思います。

1年生の全体の感想文を通覧すると、訪問学習への参加・不参加の生徒で多少温度差はありますが、全体として、ハンセン病への理解が深まったと思います。どうぞご家庭でも、ハンセン病の問題について、またさまざまな人権問題について、話し合っていたいただきたいと思います。（文責：山本秀夫）